

2014年5月31日(土)～6月1日(日)

第15回日本認知症ケア学会大会 東京国際フォーラム

外来通院における抗認知症薬の効果の家族の印象と介護情報源
付き添われたご家族のアンケートを通して

聖志会 渡辺病院 薬局 當山美奈子

【はじめに】

現在、抗認知症薬は4種類が処方可能である。しかしながら、認知機能に対する効果は微小であるといわれている。今回我々は、当院外来において認知症高齢者のご家族に対して、抗認知症薬服用後の記銘力、介護状態の変化、また介護方法の情報について聞き取り調査したので、若干の考察を加えて報告する。

【対象】

平成25年10月1日から10月31日まで、当院外来を受診した認知症と診断され、抗認知症薬を服用している患者さんのご家族。ただし、抗精神病薬服用、施設入所の患者さんは除いた。

【方法】

受診時、付き添ったご家族に対して無記名にてアンケート調査を行なった。アンケートは、抗認知症薬の種類、服用後の記銘力の変化、介護状態の変化、薬物治療継続の意思、介護方法の情報源、介護知識の印象について行なった。【倫理的配慮】対象者には研究の主旨と個人が特定されないよう配慮を行う旨を口頭に伝え承諾を得た。

【結果】

30名からアンケート回収した。抗認知症薬は、アリセプト13名、メマリー9名、併用7名。服用後の記銘力の変化は、変化なし18名、やや悪化10名であった。服用後の介護全般の変化は、変化なし21名、やや悪化6名であった。しかしながら、29名のご家族が薬物治療の継続を希望していた。また、ご家族は、介護方法をケアマネージャー20名、テレビ7名から得ており、その知識量については、普通20人、あまり知らないが10名であった。

【考察】

服用者のご家族のほとんどが、記銘力、介護全般は、不変、もしくはやや悪化している回答した。このことは認知症が進行性の変性疾患であるため、介護者がその改善効果を実感できないと考えられた。しかし、ほぼ全員が薬物治療の継続を希望していたことは、進行抑制効果を周知されているためであると考えられた。また、ケアの方法はケアマネージャーから得ているが、いまだ十分であるとは考えていなかった。今後、より家族の求めるケア方法の啓蒙、実践が必要であると思われた。